

会議議事録

事業名	平成26年度「職業実践専門課程」の推進を担う教員養成モデルの開発・実証
代表校	一般社団法人 全国専門学校教育研究会

会議名	第3回実施委員会 第4回開発・実証委員会 第5回評価委員会
開催日時	平成27年1月14日(水) 14:00~16:00(2h)
場所	グランドヒル市ヶ谷 西館3F「ペガサス」
出席者	<p>①実施委員 浦山 哲郎、井本 浩二、佐竹 新市、松井 祥高、國分 義史、山崎 彰、川崎 千春、中越 晃、川越 宏樹、片岡 均、坪内 浩一、鷺澤 文治、大平 康喜(13名)</p> <p>②開発・実証委員 伊藤慎二郎、岡村 慎一、飯塚 正成、永井 真介、大城 圭永(5名)</p> <p>③評価委員 小野 紘昭、齋藤 進(2名)</p> <p>④事務局 下島 耕一、花田香央理(2名)</p> <p style="text-align: right;">(参加者合計26名)</p>
開会	永井委員
主催者挨拶	<p>浦山会長 昨年末の実証講座開催の御礼と、成果物(テキスト、指導書)に対する評価、また今後の委員会及び全専研としての取り組み方、意気込みについて話される。</p>
議題	<p>岡村委員 インストラクショナルデザインの分科会を昨年5回開催し、インストラクショナルデザインをどのように成立させるかを議論してきた。職業実践専門課程として企業のニーズを取り入れたカリキュラム・シラバスの作成が出来る教員の養成が目的。テキストの俯瞰図を見ながら説明する。教育目標の明確化、またPDCAを回しながら、プランに教育課程編成委員会の意向を取り入れていく。企業団体との連携を目的とし、インストラクショナルデザイ</p>

<p>評価委員</p>	<p>ンの考え方を教育課程編成委員会に繋げていく。 今年度のテーマがあいまいになった部分があった。インストラクショナルデザインを「学科の到達目標設定」か「科目のシラバス目標・評価」「授業の目標・計画・評価」のどの部分で利用するか議論になったが、結果、「授業の目標・計画・評価」をテーマに実証講座を行った。 成果物として、 インストラクショナルデザイン講師用指導要領の説明。 実証講座のタイムスケジュールの説明 事前アンケート（500名強）に関して説明、その中で77%の教師がIDの経験がないので、今後IDの理論と手法を修得すれば、授業の改善に役立てるだろう。 今後の課題として、教育課程編成委員会の意向をいかにシラバス、コマシラバスに生かしていけるか。</p> <p>芦澤委員</p> <p>評価の視点は2つ</p> <p>本事業の背景として、企業との密接な連携をするよう、文科省は言っている。ID、ALを使って職業実践専門課程として、企業等のニーズを取り入れることを目標にしている。が、今回のインストラクショナルデザインの講座では、やっていない現状である。本事業「職業実践専門課程の推進を担う教員養成研修モデルの開発・実証」では、企業団体等との連携による教育課程の編成や授業運営を推進するための研修教材を複数分野を対象として開発。また本事業での教員養成研修モデルは、企業と密接に連携し、それを教育課程や授業運営に反映させ、職業教育の質を向上させられる能力を養成できるか、ということ。これを第1の「企業連携性の視点」とする。</p> <p>IDもALも小中高等どこでも使用される理論であり、それが、専門学校分野にどう適用するかが問題である。IDの方法論として、検定済教科書と学習指導要領に拘束された初等中等分野への適用と、比較的自由度の高い高等教育分野での適用の仕方は異なる。このIDとALの理論・方法論が専門学校教育分野に適合できるかが第2の視点「専門学校教育分野適合性の視点」である。実証講座テキストに関する評価として、「企業連携性の視点」からは、本講座の目的が「職業実践専門課程として企業等のニーズを</p>
-------------	---

取り入れるカリキュラム・シラバスの作成が出来る教員の養成」である。IDを適用した場合の授業設計の手順として4段階ある。企業連携性の視点で考えると(1)学科の到達目標を定める(2)教育課程を定める、がそれにあたる。(3)シラバスを作成する。(4)コマシラバスを作成する。が4段階である。(3)(4)の段階は本講座テキストに詳しく説明されているが、(1)(2)については、今講座テキストには教示がない。つまり、この実証講座テキストは、インストラクショナルデザインにおける一般的な学習目標明確化と1科目分の学習目標からシラバス、コマシラバスを作成する方法については扱うが、企業から要求される人材像やニーズを学習目標として設定する方法や企業から要求される人材像やニーズと教育課程を合致させる方法については全く教示していない。

またこの実証講座テキストは、職業実践専門課程に関わる教員に求められる一般的な能力のうち、シラバスとコマシラバスの作成に限定して扱っている。「シラバスを作成」に関しては、クラスタ分析や階層分析など複数の対処法が載っており、担当科目に適用しやすい。つまり、教員経験の依存性が軽減されている。また「コマシラバスの作成」はガニエの9教授事象を参考にしており、機械的に9段階を分割して内容を構成させる。このパターン化された方法ならば、教員経験の依存性がこちらでも軽減できる。

問題点として、教育課程編成の方法論、つまり、企業等のニーズを学習目標や教育課程編成に反映させる方法を扱っていない。

また、「ロードマップ」という文字が度々出てくるが、その使い方として、どの時点を指しているか不明、いろんな段階で使用されているが、ここを整理すれば、この講座テキストはシラバス、コマシラバスには適合していることになる。

講座の運営に関する評価はまだできていない。

永井委員

芦澤委員からのご指摘を受けて、岡村委員から

岡村委員

頂いたコメントはすべてにごもつともという感じです。

教育実践専門課程の教育カリキュラムの編成にインストラクショナルデザインを利用すると、対象者が校運営責任者か学科

長等幹部しか対象にならなくなる。今期はシラバス、コマシラバスの作成が出来る教員の育成及びIDを広めていくことに主眼を置いた。評価委員会からのご指摘は、次年度に解決していきたいと思う。

浦山会長

この事業の成果目標を再確認したい

永井委員

職業実践専門課程の質を担保するための実証講座であり、各分野や専門学校を横断的に出来るものを作成する。教員の経験値に関係なく、IDの手法を用いることで、シラバスの作成等に関して教員の負担を軽減させられる、成果物を作成していくことが目標である。

アクティブラーニング

伊藤委員

テキストの4ページ、85ページがまだ未完成。

アクティブラーニングは受動的な授業から能動的な授業への転換。アクティブラーニングに取り組んだ理由は、学習指導要領の改訂がある。ALはすでに大学では取り入れている。それが小中高まで広がっていく。ALで学んだ学生が専門学校に入学してくるのは2020年。別な理由として、工業化社会から知識基盤社会に移行していくこと。また、専門学校でスキルを学ぶだけでなく、「社会人として成長し続ける力」を身に付けさせることが大事。開発の目的として、4つを説明。

研修の目標として、6つを説明。

事前講義（9時間）の内容説明

実証講座（2日間）の内容説明

事後講義（9時間）の内容説明

事後講義は文科省の報告には間に合わない。

この事業における新しいアクティブラーニングの定義の説明。

AL型授業の定義の説明

アクションラーニングの定義の説明。

企業の社員教育として生まれた、アクションラーニングの3つのメリット「組織の問題解決」「個人の成長」「組織の成長」

実証講座の2つの目的

1、AL型授業を通して「学習する個人」「学習する組織」の育成

2、AL型授業を通して「リーダーシップスキル」を育成

AL型授業を導入する上での3つの要件（15ページ）

解決手段の2つが示される

初日にAL型授業（高校物理）を体験してもらい、AL型授業がすべての科目で利用できることを体感してもらう。この時の授業プロセスを説明

2日目のアクションラーニングの説明。4人ずつの5グループを形成して、1人が1つの課題をあげ、それを全員で解決する、という作業を4回行った。

評価委員

小野委員

中央審議会の「新しい教育手法、能動的な学習方法」が求められている。アクティブラーニングは企業研修でも盛んに行われており、その実効性は証明されている。アクティブラーニングを利用して新しい教育手法を取り入れることは、当然の流れである。この実証講座では、初日のアクティブラーニングは目標の明確化、グループ学習、リフレクション等の一連のプロセスを重視する学習方法である。しかし2日目のアクションラーニングは課題を共有しながらグループ学習を行い、そのプロセスの中で組織全体に学習する力をつけるという組織開発の手法である。今回の講座にアクションラーニングの手法が適しているかという疑問である。この2つの目的、概念が違うものが、教員に能動的学習の手法を学ばせるという今回の講座に連携して、関連づけられているかは、最後まではっきりしなかった。

この講座には、教員に能動的な学習方法を修得させるという目的と、学生が社会人になった時に、課題を共有化して問題解決できる人材を育成するという、異なった2つのプログラムが混在していたのだと思う。

教員の資質を向上させる観点について、

アクティブラーニングは専門学校教員の教育手法の意識改革という点では有効な誘因になる。しかし、教育手法としてのアクションラーニングの位置づけは不明。アクションラーニングはその解釈や手法も様々であり、その有効性もまちまちであるため、専門

学校の教育にどれが良いかは議論の余地がある。特に今回の講座は、指導者の経験知と個人技によるものが大きく、たくさんの手法を用いており、一般の教員がそうした手法を身に着けるには、よほど汎用的な成果物が必要になる。

「職業実践専門課程」との繋がりについて

教員の資質向上について、「企業等との連携の下、職業に関連した実務に関する知識、技術及び技能並びに授業及び学生に対する指導力等の修得・向上のための組織的な研修機会を確保する」となっている。教員に新たな教育手法としてアクティブラーニングの手法を使った講座を行うのは意義がある。そのためには、今回の講座でも、企業との連携を伴う形での内容にするのが良かったと思う。

伊藤委員

小野委員のご指摘通りで、もう一度整理し直して次年度には専門学校先生方を巻き込んで、またALの手法を使って教材開発を行っていきたい。

永井委員

本日の意見を参考に最終の成果物を作成するので他の委員の方々もご意見を頂きたい。

浦山会長

特定の先生達への依存度を減らす目的があった。しかし今日のアクティブラーニングの指摘は、講師の力量・経験値に頼る部分が大きいとのこと。最初の目的に合致していない。もっと汎用的な誰でも出来るものを作り上げる必要がある。

鷺澤委員

ALには合う教科とそうでない教科があるのでは。またテキスト全部をALの授業で行うことは、事前の準備にかなりの時間がかかるために、大変な作業量になると思われる。学生同士が話し合ったり教えあうことは非常に良いと思う。

伊藤委員

アンケートにも、資格試験の授業で有効的で利用してみたいとい

う意見があった。また不安な意見として「教科書が終わらないのでは」「成績の上位、下位全員に役立つのか」といったものがあり、それらに対する講師の回答を説明

川崎委員

新潟の取り組みとして、

ALの欠点として、「集中力の欠如」「知識の定着がしづらい」

「その確認もしづらい」があげられる。但し組織で取り組むことに関しては大変効果的。現在ALの授業は、簿記の経験のない学生に日商簿記3級の講座に利用、簿記の導入部分として大変効果がある。しかし、1・2級になると、個人の学習レベルの差が大きく、出来る子が出来ない子に教えられない。なぜなら、個人差が大きいため。また、税理士を受験する学生達は一定の高レベルにあるため、ゼミ形式の授業でALを利用している。非常に効果的。ALの手法を利用するなら、レベル、ラベルを厳選すべき。また、ディベート力が落ちる可能性が高い、それをどう補うか。また、ミニテスト、実験、調査といったものが出来ない、その補填も考えないといけない。指導者に、高い教務力とコメントター力がないと、学生の理解が落ちる。ALはすばらしい方法論だが、すべてに当てはまるわけではない。課題を抽出した中で、得意点を伸ばしていくというやり方を課題と考えている。

川越委員

今度の文科省の有識者会議に今回の成果物を持参してお披露目してきます。

伊藤委員

次年度の委員に、新潟グループから入ってもらう必要がある。

井本委員

小中高の先生たちの今後の研修はどうするのか、内容等知りたい。また自分の学校の教師達にもALの手法を学ばせたいが、独自のものになってしまい、主流とかけ離れる心配がある。

伊藤委員

新潟の取り組み方が大変参考になった。何にスポットを当てて、

どの部分に力を入れるかについて次年度の課題にしていきたい。

浦山会長

このプロジェクトの目的を踏まえて、企業と連携し、ID、ALが連動しながら、次年度もこのプロジェクトを引き続きやって頂きたい。

飯塚委員

小野委員が指摘されているが、新潟以外の学校でもALを活用しているところがある。各科目の導入部分だけに利用しており、かなり成功している。次年度はこういう事例も参考にしていきたい。ALに関してはまだ未完成。講師の力量がないとできない授業。汎用性が図られていない。また個人名や書籍名が出ているのもまずい。テキストをもう少しクオリティーの高いものにする必要がある。IDの方はまとまりは良い。上流工程と下流工程のうち、上流工程の企業が求める人材を作るためにはどういう要素が必要かを話し合い、それをカリキュラムに落とし込んでいく部分がまだない。下流工程は設計図も出来ており、各学校でシラバス・コマシラバスの作成を行っていきける。しかし1回やっただけでは、意味がなく、継続させる必要がある。循環させて、その情報を積み上げて共有していく、そこで広がりが出てくると思う。

伊藤委員

ホームページ上で公開するので、その説明を資料を見ながら行う。

永井委員

今後のスケジュールについて説明

以上